世間解　第四三〇号
令和五（二〇二三）年　十二月
発行　西法寺

念仏もうさるべし

―摂取不捨　その二―

十二月になりました。皆さまにはご本願のおはたらきの中「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏ご相続のことと存じます。あっという間に歳の暮れであります。本年も何かとお世話になりましたことあらためてお礼申しあげます。ありがとうございました。

大晦日には久しぶりに除夜の鐘（午後十一時開始）からご本堂におあがりいただいてご一緒にお正信偈さまのお勤めをさせていただこうと思います。“新年のご挨拶はまず阿弥陀さまに”どうぞお参りくださいませ。

さて、先月より阿弥陀さまのおはたらきである「摂取不捨」のお心についてお聞かせをいただいております。前回は蓮如上人がよくお話しになられたという唯蓮という方の逸話をお聞かせをいただきました。

唯蓮が「摂取不捨」のお心を知りたいと思って阿弥陀さまに祈誓をされた。すると夢に、眼の前のお座りになっている阿弥陀さまのお像がお立ちになって自分のところまで来られて袖をつかまれた…。唯蓮は驚いてその手を振りほどいて逃げようとされた。しかし阿弥陀さまは決してその手をお離しになることが無かった…。というお話であります。

先月の『世間解』を書かせていただいてから、自分ならどうだろうかと考えていました。

西法寺のご本堂の阿弥陀さまがもし動きだされたら…。間違いなしに私は驚いて逃げることでしょう。逃げる前に腰を抜かして動けなくなってしまうかもしれません。

お家におられる、ご絵像の阿弥陀さまでも同じことです。その阿弥陀さまがお軸から出て動きだされたら。お同行さまのお家にお参りに寄せていただいている時、拝んでいる阿弥陀さまが動ごきだされたら私はきっと声も出なくなるだろうなと…。

『法敬坊、蓮如上人へ申され候ふ。あそばされ候ふ御名号焼けまうし候ふが、六体の仏になりまうし候ふ。不思議なることと申され候へば、前々住上人（蓮如）そのとき仰せられ候ふ。それは不思議にてもなきなり。仏の仏に御成り候ふは不思議にてもなく候ふ。悪凡夫の弥陀をたのむ一念にて仏に成るこそ不思議よと仰せられ候ふなり。』『蓮如上人御一代記聞書』というお聖教の一説であります。蓮如上人のお弟子であった法敬坊順誓というかたが、蓮如上人からいただいたお名号が火事にあって焼けた時、「その煙の中から六体の仏さまが出てこられました不思議なことでした。」とおっしゃった時、蓮如上人は「南無阿弥陀仏というお名号は、元々仏さまそのものじゃないか、字の仏さまがお相の仏さまになられただけだ。それは不思議でも何でもない。私たち悪凡夫が阿弥陀さまの教えを聞かせていただいてさとりの身とさせていただく。これが本当の不思議ということだよ。」とおっしゃられたというのであります。これは改めてお聞かせをいただきますが、「南無阿弥陀仏」さまはそのままが阿弥陀さまの救いのおはたらなのであります。

私が今「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏申すことが出来ている、お念仏さまが届いてくださるご縁にあるということが、阿弥陀さまの私を救いきってくださる「摂取不捨」というおはたらきであり、動きであります。阿弥陀さまは動き続けてくださっていて何の不思議もないのでしょう。阿弥陀さまは動き続けてくださっているのです。

お木像だと思っている、ご絵像だと思っている阿弥陀さまが動きだされると私はびっくりして腰を抜かす。私は驚いて逃げてしまうのでしょう。もしかすると、そんな私が驚ろいて「恐わ～、恐ろしい～、もうイヤ」いうてご法義から逃げないように動ける阿弥陀さまは今日も黙ってジーッとしてくださっているのでしょう。

合掌